様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７０１１１

研究課題名（和文）明治・大正時代の日欧演劇交流再考―イギリス・アイルランド演劇の生成と伝播を中心に

研究課題名（英文）Reconsidering the Cultural Exchanges between Japan and Europe in the Meiji and Taisho Eras: Reciprocal Influences on Japanese, British and Irish Theatre

研究代表者
日高　真帆（Hidaka, Maho）

京都女子大学・文学部・教授

研究者番号：９０４０７６１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、イギリス・アイルランド演劇を中心に、明治・大正時代の演劇界に於ける日本と欧州との交流及び影響関係の諸側面を明らかにすることができた。研究期間全体を通して関連する研究論文から上演プログラム・新聞・雑誌に至るまで関連資料を幅広く収集し、分析・考察を進めた。その結果、19世紀末前後の時期に生成されたイギリス・アイルランド演劇への日本文化の影響や、日本での受容の特徴が明らかになった。研究成果は複数の研究出版物や国際学会での研究発表を通して公表してきた。

研究成果の概要（英文）：This research has revealed aspects of the exchanges and influences between Japanese and European theatre, mainly British and Irish theatre, during the Meiji and Taisho eras. Throughout the research period, I collected, analysed and examined a wide range of material on the subject from academic articles to theatre programmes, newspapers and magazines. This led to enclosing Japanese cultures' influences in the making of some British and Irish plays in the nineteenth century as well as characteristics of their reception in Japan. The outcome has been publicised in academic publications and presentations in international conferences.

研究分野：イギリス・アイルランド演劇

キーワード：イギリス・アイルランド演劇　比較文学　比較演劇　比較文化　オスカー・ワイルド

１．研究開始当初の背景

本研究「明治・大正時代に於ける日欧演劇交流再考 イギリス・アイルランド演劇の生成と伝播を中心に」は、6 年間の研究成果を踏まえたものである。具体的には、2008 年度から 2010 年度迄科学研究費若手研究(B)による研究課題「日本におけるワイルド劇の受容に関する比較文学・比較文化的研究」に従事し、日本に於けるワイルド劇の受容について、特に受容度が高い悲劇『サロメ』と受容度が低い全四篇の喜劇作品とが置かれてきた対照的な状況に着眼し、比較文学・比較文化的研究を行った。また、2011 年度から 2013 年度迄は科学研究費基盤研究(C)による研究課題「ワイルド受容の系譜―日本と英語圏諸国との比較研究―」に従事し、日本と英語圏諸国（特にイギリス、アイルランド、アメリカ、オーストラリア）に於けるワイルドの受容状況の比較研究を行うと共に、その比較対照により、日本に於けるワイルド受容の特徴の解明にも取り組んできた。これらの研究成果や研究活動から、新たな研究課題として、明治・大正時代の演劇界に於ける日本と欧州との交流及び相互影響関係について、同時期のイギリス・ アイルランド演劇に着眼して再考する必要性と意義とが明らかになったのであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、明治・大正時代の演劇界に於ける日本と欧州との交流及び相互影響関係について、同時期のイギリス・アイルランドの演劇作品に着眼して再考することである。具体的には、明治・大正時代に該当する欧州の 19 世紀末前後の時期に制作されたイギリス・アイルランド演劇に焦点を当て、その生成や諸外国への伝播の過程に於いて日本文化や日本の文化人が如何に関わっていたかについて究明する。その際、日本国内や一方的影響関係に留まらず、日本国内外に於いて、日欧の文化人や芸術作品を通して実現した双方向的影響関係を明らかにし、新たな視座から検証を行う。

３．研究の方法

本研究は国際的視野に立つ学際的研究であるため、国内外で多面的に研究活動を行った。第一に、国内外の大学図書館その他の図書館において資料収集と調査研究を進めた。その際、世紀末前後の社会的、文化的背景に関する資料や、演劇、比較文学、比較文化関係の資料を幅広く収集した。第二に、関連作家・演劇人縁の資料館その他施設にて調査研究を進め、紀行文や手記・書簡を含む関連資料も収集した。第三に、最新の研究動向を把握して、随時研究課題の確認と調整を行った。また、演劇研究、比較文学研究、英文学研究、アイルランド研究等複数分野の国内外の関連学会に積極的に参加して研究発表を重ね、 国内外の研究者との交流や議論も活発に展開した。

４．研究成果

2014 年度はワイルドの受容研究の成果を纏め、以下の研究論文及び研究発表の形で成果発表を行った。まず、6 月 11 日から 6 月 15 日までパリで開催された国際ワイルド学会 “Wilde Days in Paris 2014” に参加して研究発表を行い、世界各国からのワイルド研究者らと議論を深めた。本学会は、フランスのオスカー・ワイルド協会が中心となって運営した国際ワイルド学会であり、ワイルドやアイルランド文学の研究を深める上で極めて貴重な機会となった。発表題目は “Wilde Streams and Their Expansion in Japan” であった。本研究発表に於いては、日本でワイルドが受容されるに至った多様な経路について調査した研究成果を発表した。

また、谷崎潤一郎によるワイルド受容について英語論文 “Portraits on the Human Body: Japanese Adaptations of Oscar

Wilde by Junichiro Tanizaki” を執筆し、英国オスカー・ワイルド協会の学会誌である The Wildean: A Journal of Oscar Wilde Studies に掲載された。本論文では、ワイルドの喜劇作品の翻訳も行った谷崎の作品とワイルド作品との比較考察を行い、谷崎によるワイルド受容の特徴と彼の独自性について議論を深めた。

尚、本稿は、海外の学術雑誌 *Me Cayó el Veinte: Revista de Psicoanálisis* の編集長 Rodolfo Marcos-Turnbull 氏からスペイン語に翻訳したいとの依頼を受けて、Marcos-Turnbull 氏によって翻訳されて *Me Cayó el Veinte* 31 号に掲載され、2015 年 7 月に出版された（pp.161-175）。スペイン語訳された論文題目は “Retratos Sobre el Cuerpo Humano: Adaptaciones Japonesas de Oscar Wilde por Junichiro Tanizaki” である。

2015 年度は、前年度に得られた結果を基にして引き続き調査研究や研究成果論文の執筆を進め、関連する英文学作品やそれらの日本に於ける受容に関する資料を幅広く収集し、先行研究の調査も行った。具体的には、明治・大正時代に該当する 19 世紀末前後の時期に発表されたイギリス・アイルランド演劇の内、同時代に日本に移入された作品を洗い出すため、緻密な資料調査を続けた。調査対象資料は多岐に渡るが、第一に、『演藝画報』等の演劇雑誌を始めとする各種雑誌等の関連資料を扱い、分析を行った。また、同時代の日欧演劇交流の関連文献についても情報収集に努めた。

また、これまでのワイルドの作品研究の総括を行うと共に、原作への理解と日本に於けるワイルドの作品受容への理解を繋げるべく、ワイルドの短篇小説、長篇小説及び戯曲を中心に、ワイルドの作品研究を幅広く行い、異なるジャンルの作品間の関連性についても分析を深めた。その研究成果の公表に際しては、平成 27 年度京都大学総長裁量経費人文・社会系若手研究者出版助成に申請して採用され、2016 年 3 月に開文社出版より英文による単著 *Oscar Wilde Reappraised: Fiction and Plays* を出版するに至った。

本書は全十章から構成される英文による単著であり、総頁数は 252 頁である。具体的には、短篇小説集『アーサー・サヴィル卿の犯罪他三篇』、長篇小説『ドリアン・グレイの肖像』、悲劇『サロメ』及び四篇の喜劇作品『ウィンダミア卿夫人の扇』、『つまらない女』、『理想の夫』、『真面目が肝心』を主に扱い、これらの作品を個別に分析すると共に、ワイルドの作品間やワイルドの作品と同時代の他の作家の作品との比較研究も進め、更に『獄中記』とも議論を関連づけた。このように、敢えてジャンルを越えてワイルド及びその関連作品を扱うことにより、後世にも多方面で影響を与えたワイルドの多面性及び異なるジャンルの作品間の関連性の解明を行った。

2016 年度は、研究課題に則して国内外で資料収集や調査研究を進めた。特に、三島由紀夫によるワイルド受容について研究を深め、7 月にはウィーン大学で開催された国際比較文学会第 21 回国際大会に於いて研究発表を行った。発表題目は “Languages of Salome: Wilde, Mishima and Beyond” であった。

また、研究期間全体を通して、イギリス・アイルランド演劇を中心に関連する英文学作品やそれらの日本に於ける受容に関する資料を幅広く収集し、先行研究の調査も行った。そして、国際学会での研究発表及び海外の学会誌上に於いて研究成果を発表し、戯曲や演劇人のみならず演劇と関連性の深い作家や作品の研究を通して明治・大正時代の日欧演劇交流の一端を明らかにできたことは非常に有意義であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

1. **単著論文（英文）** “Portraits on the Human Body: Japanese Adaptations of Oscar Wilde by Junichiro Tanizaki”、**日高真帆**、*The Wildean: A Journal of Oscar Wilde Studies* **第** 46 **号、（英国）** Oscar Wilde Society、pp.72-87、2015 **年** 1 **月、査読有。**

〔学会発表〕（計２件）

1. **国際学会口頭発表（英語）** “Languages of *Salome*: Wilde, Mishima and Beyond” 、**日高真帆**、International Comparative Literature Association **第** 21 **回国際大会、於 ウィーン大学、**2016 **年** 7 **月** 25 **日。**
2. **国際学会口頭発表（英語）** “Wilde Streams and Their Expansion in Japan”、**日高真帆、国際ワイルド学会** “Wilde Days in Paris 2014”**（運営：** Société Oscar Wilde**（フランス、オスカー・ワイルド協会））、於** Centre Culturel Irlandais**（フランス、パリ、アイルランド文化センター）、**2014 **年** 6 **月** 13 **日。**

〔図書〕（計１件）

1. **単著（英文）** *Oscar Wilde Reappraised: Fiction and Plays*、**日高真帆、開文社、総頁数** 252 **頁、**2016 **年** 3 **月（平成** 27 **年度京都大学総長裁量経費人文・社会系若手研究者出版助成による出版）、（出版助成申請に際して）査読有。**

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
京都女子大学ホームページ
http://gyouseki-db.kyoto-wu.ac.jp/Profiles/1/0000055/profile.html

６．研究組織
(1)研究代表者
日高　真帆（HIDAKA MAHO）
京都女子大学・文学部・教授
研究者番号：90407619

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）